

# 進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる小学校英語

- 高学年児童の自己効力感に着目した指導の工夫 -

和 泉 沢 優 美<sup>1</sup>

小学校では、高学年になるにつれて英語活動が楽しくないと感じる児童が増え、進んで活動に取り組みようとする意欲を高める指導の工夫が求められている。そこで、英語活動についての児童の意識や学習経験を調査・分析し、自己効力感に着目した指導計画の作成や指導方法の工夫に取り組んだ。そして、授業実践を通して、児童に進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することができたかどうかについて検証した。

## はじめに

所属校では2006年度に全学年を対象とした英語活動に関するアンケートを実施した。その結果から、英語を覚えられない、簡単すぎておもしろくないなどの理由で、英語活動を楽しくないと感じる児童が、高学年になるにつれて増えていることが明らかになった。このような児童にとっての英語活動は、今までに身に付けてきた力に応じておらず、難しいと感じたり、また、力を十分発揮できず、簡単すぎると感じたりする活動になっている。そのために、児童は、英語活動をやり遂げた気持ちになれないでいる。このことは、児童に進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する上で、課題の一つになっている。

高学年児童に多く見受けられる、この課題を解決するために、自己効力感に着目した。英語活動における自己効力感に焦点を当てた指導計画を作成し、指導方法を工夫することで、児童に進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することができると考え、研究を進めることとした。

## 研究の内容

### 1 「進んでコミュニケーションを図ろうとする態度」とは

小学校における英語活動は、国際理解の一環として、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど、小学校段階にふさわしい体験的な学習を行うことが基本にある。

また、中央教育審議会（2006）は、英語活動の内容について、「英語で聞くこと、話すこと等の言語活動を実際に行ってみるにより、英語を通して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ったり、言語や文化への体験的な理解を図ったりするこ

と」としている。

本研究では、まず、高学年児童が進んでコミュニケーションを図ろうとする態度とは、どのような姿であるか考察した。

小学校英語では「聞く」「話す」活動が中心となる。しかし、高学年では心理的発達もあり、大きな声で話したり、恥ずかしがらずに話したりすることは苦手と感じる児童もいる。このことを踏まえた上で指導を工夫していきたいと考えた。また、英語活動を楽しんでいることが、コミュニケーションを図ろうとする積極性につながると考え、「かかわる」「楽しむ」という児童の姿にも注目した。以上のことから、進んでコミュニケーションを図ろうとする態度とは、第1表に示す児童の姿に表れるものであると、設定した。

第1表 進んでコミュニケーションを図ろうとする態度とは

・聞く	相手の目をしっかり見て聞く。
・話す	みんなに聞こえる大きな声で話す。 恥ずかしがらずに話す。 相手によく分かるように話す。
・かかわる	なるべく多くの人と会話する。 進んで活動に参加する。 友達と協力して活動する。
・楽しむ	活動を楽しむ。

### 2 自己効力感と指導の工夫

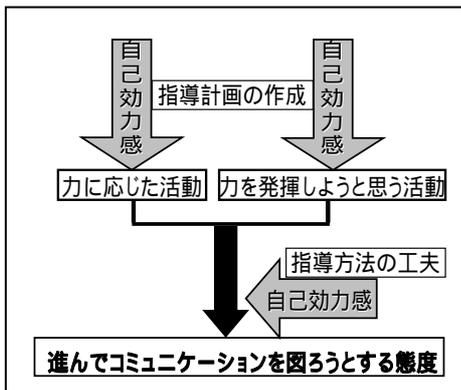
#### (1) 自己効力感とは

自己効力感とは、バンデューラが提唱したもので、現代学校教育大事典(1994)では、「ある課題を自分の力で効果的に処理できるという信念」と定義されている。

バンデューラ(1997)は、「私たちは、もし自分の行為によって、望ましい結果を生み出すことができると信じなかったならば、行動しようという気持ちにはあまりならないでしょう。」と述べている。

本研究テーマである、進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を児童に育成するためには、児童が

1 横須賀市立鷹取小学校  
研修分野（小学校英語）

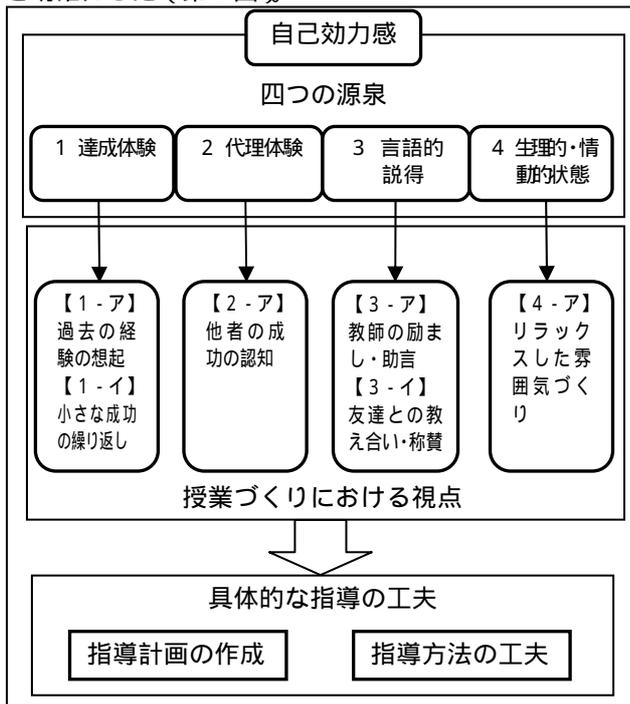


第1図 進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる指導の工夫

自己効力感に着目して、力に応じた活動、力を発揮しようと思う活動を設定し、指導計画の作成及び授業場面での指導方法の工夫を図ることが大切である。

(2)指導の工夫

自己効力感の源泉には、達成体験、代理体験、言語的説得、生理的・情動の状態の四つがあると言われている。各源泉は英語活動の授業づくりではどのような視点からとらえられるのか考え、具体的な指導の工夫を明確にした(第2図)。



第2図 自己効力感の源泉と指導の工夫

視点ごとの具体的な指導の工夫について次に記す。

《1 達成体験》

過去の経験の想起【1-A】

自己効力感を最も感じることができると思われるのは、過去に身に付けてきたことを生かすことができるという自信を持つときである。初めて聞いた英会話であったとしても、既に習った経験がある言葉を見つけさせたり、同じような言い方をしている部分に気付か

せたりして、児童が過去の経験を生かせるように題材や会話を組み立てる。

英語活動が簡単すぎてつまらないと感じている児童にとっては、今までの学習経験を振り返り、基本的な会話を発展させる場面を設け、自己効力感を持って意欲的に取り組めるような活動を設定する。

授業後に振り返りをする 것도、自己効力感に結びつくと考えた。自分がその学習活動でどんな力を身に付けることができたのかを確認することが、達成体験につながると考えられるからである。

小さな成功の繰り返し【1-I】

学習の流れの中で小さな成功を何度か味わうことにより、自信を深め、進んで課題に挑戦するような態度の育成を図る。そのためには学習形態を工夫し、同じ内容であっても飽きずに練習できるようにする。形態が変わるたびに、できたという成功感を持つことができるからである。

最初は一斉に練習し、次に小さなグループで練習や発表をする。最終的には全員の前で発表する。このように、同じような内容であっても、様々な活動形態で会話することによって、自信を持ってなかった児童が達成体験を重ね、他者前で発表できるようになることを目指す。

《2 代理体験》

他者の成功の認知【2-A】

児童は、友達の会話を聞き、友達の成功を見ることで、自分もできるかもしれないという気持ちになる。そこで、グループ活動の場面を設定し、友達の活動を間近で見る機会を設ける。

また、全員が注目する中で代表として声を出すことは、英語に対して消極的な児童にとっては勇気を要する。しかし、練習を積んでいくうちに、友達が全員の前で発表するのを見て、自分もやればできるだろうという気持ちが生じる。

《3 言語的説得》

教師の励まし・助言【3-A】

機会あるごとに児童をほめたり励ましたりすることは大切なことである。児童の学習の状況をよく把握し、個に応じた励ましや助言を与える。

友達との教え合い・称賛【3-I】

グループ活動において、友達に教えたり友達から教えてもらったりすることは、活動がしやすくなるとともに、よりよいコミュニケーション活動をするにつながる。協力して活動する場面を設定することで、自然に教え合いが行われるようにする。

一緒に活動している友達からほめられることは、児童本人の自信を深め、さらに友達の活動に注意を払うことにつながる。活動の中で友達の良いところを見つけてるように促す。

《4 生理的・情動の状態》

### リラックスした雰囲気づくり【4 - ア】

全体で活動するだけであると、本当は困っていたり、聞きたいことがあったりしても、児童は発言する勇気を持ってないことがある。そこで、Support Teacher（英語が堪能な地域の授業協力者、以下STと略す）がグループに入ることにより、児童は、より聞きやすくリラックスした雰囲気です活動することができる。STに対する親近感も増すことができる。

また、明るくあいさつしたり、歌を歌ったりすることも気持ちをほぐすことにつながる。

### 3 検証授業

検証授業前の9月中旬に、対象となる第6学年児童33名に事前アンケートを行い、英語活動に対する意識や経験を調査した。その結果を基に指導計画を作成し、10月中に、検証授業を4時間実施した。自己効力感に着目した指導の工夫が有効であったかどうかについて、授業中の観察や、授業後に児童が記入する振り返りカード及び事後アンケートを分析することによって検証した。

#### (1) 指導計画の作成

##### ア 指導計画作成上の留意点

指導計画を作成するにあたり、次の点に留意した。

- ・対象となる児童の過去の英語活動経験の洗い出し  
対象児童が、これまでどのような英語活動を行ってきたか調べる。過去のカリキュラムを確認し、児童の英語活動歴を探るとともに、学級担任への聞き取りにより、授業における個々の児童の取組の様子を知る。児童にとって力に応じた活動、力を発揮しようと思う活動になるようにする。
- ・対象となる児童の英語活動における意識調査  
事前アンケートを実施し、児童が過去の活動に対してどのような意識を持っているか、また、どのようなことに興味・関心を持っているかを探る。
- ・STやAssistant Language Teacher（外国語指導助手、以下ALTと略す）とのふれあい  
STやALTとふれあうことは、異文化を持った他者とコミュニケーションを図ろうとする機会になる。児童にとって、自分の話したことが相手に通じたと実感することは、自己効力感へとつながる。指導計画を作成するにあたっては、STやALTと十分に話し合い、それぞれの持つ文化を踏まえるようにする。

##### イ 本研究における題材について

所属校の年間計画では、第6学年における9月から10月の英語活動の題材は、「世界に目を向けよう」が設定されている。この題材は、日本語が通じない相手とコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるのにふさわしく、また、言語や文化の体験的な理解にもつながると考えた。

事前アンケートの結果から、海外旅行に出かけた時

に英語を使ってみたいと答えた児童が多かったため、このことを生かして授業を組み立てていくことにした。

世界に目を向ける取りかかりとして、国名当てクイズを設定した。国名については、前年度の「総合的な学習の時間」で、興味を持っている国について調べる活動を行っているため、児童はある程度情報を持っていることが予想された。クイズに正解することで、今後の取組に意欲が増すであろうと考えた。

国名については、日本語名と英語名がまったく違う国もあれば、似ている国もある。児童は、動物や色の名前などの英語名を知った時、「日本語と同じようだけど、ちょっと違って聞こえる」という経験をしてきている。国名が日本語表現と似ていても、英語における発音は異なることに気付くことができる。

日本語と英語の類似については、日常生活において児童は、国名に限らず外国製品や外国の有名人などに、実は思った以上に接している。また外国語と思っていなくても、和製英語で外国（英語圏）ではまったく通じなかったり、反対に日本語がそのまま英語に取り入れられていたりする場合もある。そのおもしろさを感じられる機会を設けたい。

日本以外の国を自分の国と仮定することで、児童はその国に親しみがわき、進んで調べようという気持ちになるのではないかと考えた。また、お互いに自己紹介のやりとりをする場合にも、友達がどんな国を選んだのか、どんな名前にしたのかなど、興味を持って活動に取り組むことができる。そして、児童がパスポートを自作し、活用することで、将来の海外旅行で実際に役立ちそうであると思えるようにした。

以上の点を考慮して、第2表のような活動の流れを設定した。

第2表 「世界に目を向けよう」活動の流れ

第1時	ALT しょうかいクイズにちょうせん
第2時	名前と出身国を聞き合おう
第3時	入国しんさをうけよう
第4時	名物の発表をしよう

##### ウ 指導計画

第1時では、国名当てクイズをした後、ALTとのコミュニケーションを深め、外国への興味を高めるため、ALT紹介クイズをすることにした。その後、児童は、もし自分が日本以外の国に生まれたとしたら、という設定で、仮の自分の名前、出身国を決める。

第2時では、チーム対抗のゲームをしたり、自分が作成したパスポートを使って会話をしたりすることにより、友達とのコミュニケーション活動を多く取れるようにした。

第3時では、児童は海外旅行者として自分が出身国として決めた外国から日本に入国するという設定にし、

STは入国審査官として、児童が自作したパスポートに合格印を押すという活動をするようにした。

第4時では、STに、自分が出身国と決めた国や仮の名前、名物の紹介をした後、一人ひとりが、クラス全員の前で、PCやプロジェクタ等のICT機器を活用して発表することにした。

#### (2)実際の授業における指導の工夫

自己効力感に着目した指導計画に沿って4時間の検証授業を行ったが、第1時から第3時についてはその概略を、第4時については指導方法の具体例を、次に記す。

##### ア 第1時

第1時は聞くことを中心とし、国名の英語表現等を話す場面は最小限にとどめ、クイズ形式で国名当てとALTの自己紹介を行った。英語を聞き取るとは難しいと感じている児童の負担を軽くするために、ICT機器を利用し、映像も内容理解の一助となるようにした。

国名当てクイズでは、第5学年の「総合的な学習の時間」で実施した外国調べの経験を生かし、児童は、ある程度の自信を持って答えられると考えた。

また、ALTの自己紹介は既の実施されていたが、本時以前には3回しか授業を行っていないため、児童とALTとは、うち解けるほどまでには至っていない。再度、クイズ形式でALTの自己紹介を行うことにより、児童はALTに親近感を持ち、以降の児童自身の自己紹介において、この経験を生かして、活動に取り組むことができた。

クイズに正解することを重ねることで、児童は概要を聞き取れたという自信を持つことができた。また、すべて聞き取れなかったとしても、話の内容を理解できたという安心感を持つことができた。

##### イ 第2時

第2時では、第6学年以前に経験したゲームを用いて、国名を何度も言う機会を設けた。

一列に並べて伏せてあるカードの一枚目を表に返してどこの国か判断し、声に出して国名を言う。これを繰り返して、反対側から同じように進んできた児童と出会ったところでじゃんけんをする。勝ったら前に進めるが、負けたら同じグループの次の児童が、最初のカードからやり直さなければならない。繰り返し国名を言ったり聞いたりすることにより、児童は次の会話練習で、自信を持って国名を言うことができた。

同じグループの児童は、友達が困っているようであれば、応援したり、そっと答えを教えたりしてよいこととした。友達が助けてくれると安心することで、英語が覚えられないと感じている児童も、ゲームに取り組みやすくなった。

そして、自分が設定した仮の名前と仮の出身国を友達に話したり、友達が決めた仮の名前や仮の出身国を聞いたりする活動を設定した。

このような活動を通して、児童が友達とのコミュニケーションを進んで図ろうとする場面が持ちやすくなるようにした。

##### ウ 第3時

第3時ではSTが入国審査官となり、児童は外国から観光で日本に入国したという設定で活動した。入国審査は外国を訪問する際には欠かせないものである。海外旅行をした時英語で話してみたいと思っている児童にとっては、意欲的に取り組める題材であると考えた。今回の設定では、旅行の目的を「観光」に統一したが、滞在日数については、過去の学習経験を生かして、自分で決めることができた。

また、STの出身地の名物を聞く活動も行うことにより、次時での会話活動で、過去に聞いたことのある言い方としてとらえることができるようにした。

##### エ 第4時

自分が出身国に決めた国の名物をSTに伝える活動の後、ICT機器を活用して、一人ひとりが全員の前で発表することとした。以下第3表に活動の流れを示す。

第3表 第4時における活動の流れ

- |   |   |
|---|---|
| 1 | あいさつし、歌を歌う。                               |
| 2 | 仮の出身国の名物を言う全体練習を行う。                       |
| 3 | グループに分かれて、STに、自分が決めた国の有名なものは何か、一人ひとりが伝える。 |
| 4 | 自分が決めた仮の名前、仮の出身国、有名なものをクラス全員の前で発表する。      |
| 5 | あいさつし、振り返りをする。                            |

第4時の主な指導方法の工夫について、次に示す。

- ・前時までに練習した言い方を使って会話することを確認する【1-ア】

前時には、児童は、STに有名なものは何かとたずねる練習をしてきた。本時では、児童は有名なものが何であるか答える言い方 “It's famous for ~.” を理解する。“famous for” という表現は前時でも用いているので、すべてが新しい言葉ということではない。もっと英語を使ってみたい、少し難しい英語を習ってみたいと思う児童の中には、前時にSTが話していたことを思い出し、問いと答えの言い方に関連性があることに気付く児童もいたと考えられる。

また、もっと話したいと感じている児童がいることを考慮し、自分が出身地に選んだ国の有名なものなど、調べたことを発表するのに、今までに習った言い方を付け加えてもよいこととした。

- ・様々な学習形態で練習を繰り返しながら、成功感を味わうことができるようにする【1-イ】

児童が恥ずかしがらずに取り組めるように、全員一斉の練習、グループ内でのSTとの会話、全体の場での個人発表という場面を順に設定した。徐々に自

信を深められるような手順を踏んでいくことで、児童は自己効力感を持ち、進んで話そうとすることができるようにした。

- ・活動を振り返り、自分が身に付けた力を確認させる【1 - ア】

英語に対して苦手意識を持っている児童が、毎時間目標を立て、振り返りをしてきたことで、自分ができることを意識し、進んで発表しようという気持ちになることができるようにした。

- ・機会あるごとに児童を励ます【3 - ア】

自信が持てない児童にとって、STや担任にほめられたり励まされたりすることは、自信や積極性につながる。発表場面では一人ひとりに短く分かりやすいほめ言葉をかけるようにした。STには、児童に対して積極的に助言をするように依頼した。

- ・友達との教え合い・称賛の機会を設ける【3 - イ】

発表を聞いている児童は、発表する児童がとまどっている場合には小声で教えようとしていた。また、発表を終えた児童にとって、他の児童からの拍手や称賛の声は、達成感につながったと考えている。

- ・その他【2 - ア】【4 - ア】

始めのあいさつ後、“My Bonnie”を歌うことで気分をほぐし、以降の活動で声を出しやすくするようにした（リラックスした雰囲気づくり【4 - ア】）。STが各グループにそれぞれ入ることにより、少人数で一緒に行動し、友達と同じようにすれば成功できるという気持ちにさせた（他者の成功の認知【2 - ア】）。また、グループに分かれた場面で児童とSTが握手をするなど、STに対して親近感を持って活動できる雰囲気づくりを心掛けた（リラックスした雰囲気づくり【4 - ア】）。

#### 4 結果と考察

第4時の授業に参加したSTからは、「児童が自信を持って活動していた」「児童と一緒に活動できて楽しかった」などの感想があった。学級担任による児童の行動観察からは、「検証授業が進むにつれて、子どもたちの集中力が増していった」という評価があった。このことは、自己効力感に着目して指導を工夫したことにより、コミュニケーションを図ろうとする態度が児童に育ってきているためと考える。

では、実際に児童はどのように自己を評価していたのだろうか。振り返りカードと事前・事後アンケートから探っていくことにした。

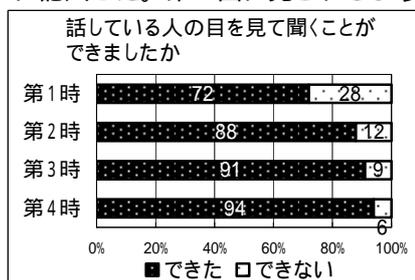
以下に、第1表に示した「進んでコミュニケーションを図ろうとする態度」の各項目の中から、特に重点的に取り上げたことについての調査結果を示す。

##### (1) 振り返りカードから

振り返りカードには、各時間の活動のねらいに沿った質問項目をのせ、児童は、「できた」「できない」で

回答した。また、児童は、毎時間授業の初めに自分の目標を設定し、授業の終末に自己評価を行った。

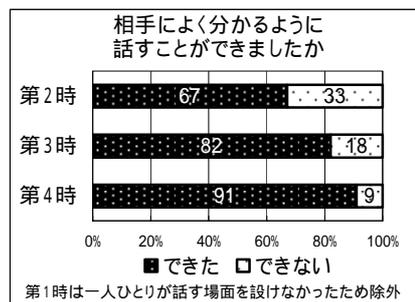
「相手の目をしっかり見て聞く」については、第1時から第4時まで、児童は毎回結果を振り返りカードに記入した。第3図に見られるように、第1時から第



第3図 振り返りカードから

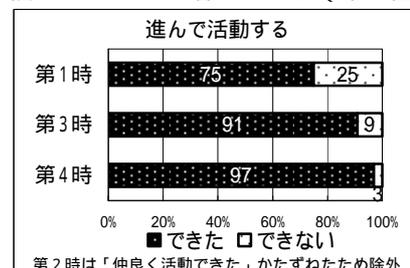
4時に進むにつれ、話している人の目をみて聞くことを意識している児童が増えていることが分かる。

「相手によく分かるように話す」については、第2時は友達との情報のやりとりが中心であり、第3時ではSTに入国審査をしてもらうことが主活動であった。



第4図 振り返りカードから

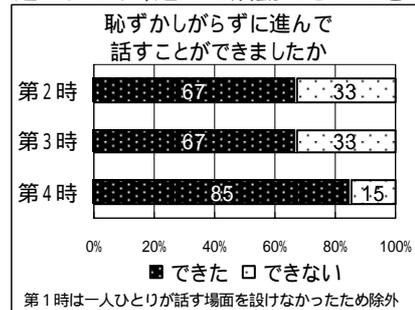
そして第4時では友達やST及び他の参観者の前で一人ひとりが発表をした。活動としては順次難しくなるにもかかわらず、できたと自己評価をする児童が増えている（第4図）。



第5図 振り返りカードから

「進んで活動に参加する」については、活動内容に沿って、児童には毎回質問文を変更した。第1時については、国名当てやクイズなど

を中心とした活動を組み、「進んで活動することができましたか」とたずね、第3時と第4時は、「友達やSTと一緒に進んで活動することができましたか」とたずねた。児童の自己評価としては、第1時から第4時に進むにつれ、進んで活動できたと感じている（第5図）。



第6図 振り返りカードから

「恥ずかしくらずに話す」については、第6図に見られるように、第2時、3時とも、「できた」とした児童は67%であった。第4時は85%と、

恥ずかしがらずに話すことができたとした児童が増えている。

さらに、第4時は公開授業であったために多くの参加者がいたにもかかわらず、一人ずつ、全員が発表することができた。このことは、第6図で「恥ずかしがらずに進んで話すことはできなかった」とした15%の児童の中にも、「恥ずかしかったが、がんばって話すことができた」と感じた児童がいたと考えられる。

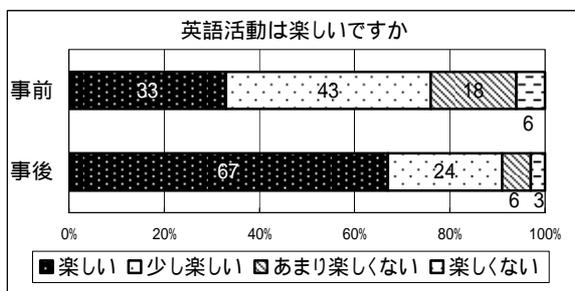
また、児童の振り返りカードへの記述から、次のことが明らかになった。

- ・英語活動が簡単すぎてつまらないと感じていた児童が、1時間ごとに目標を設定し、自分の課題に挑戦していくにつれ、前向きに取り組もうとする姿勢が強くなってきた。
- ・自己の目標を高く設定していたために、やり遂げた気持ちを持ってないでいた児童が、助言によって適正な目標を立てることができるようになり、満足感を得られるようになってきた。
- ・難しすぎるために楽しくないと感じていた児童が、練習を積み重ねていくことで、成功感を味わうことができた。

毎時間、児童が自分の目標を設定したことは、目標を達成しようとする信念を高めるのに役立つとともに、達成のための努力も促進したと考えられる。

#### (2) 事前・事後アンケートから

「活動を楽しむ」については、検証授業前と検証授業後の児童の意識を比較した(第7図)。



事前アンケートでは、英語活動を「楽しい」と感じている児童より、「少し楽しい」と感じている児童が多かった。英語活動を肯定的にとらえているものの、場面によっては、楽しくないと感じることがあったと考えることができる。しかし、事後アンケートでは、「楽しい」と感じている児童が、33%から67%と、約2倍になっている。また、「あまり楽しくない」「楽しくない」と、英語活動に対して否定的にとらえていた児童も、24%から9%に減少している。

以上の結果からも、検証授業後は、英語活動を以前より楽しいと感じている児童が増えたことと考えることができる。自己効力感に着目しながら設定した活動が、力に応じた活動、力を発揮しようと思う活動になりえていたからであると考えられる。

高学年児童に進んでコミュニケーション活動を図ろうとする態度を育てるために、自己効力感に着目した指導計画を作成し、指導方法の工夫を試みた。そして、検証授業の結果を、「進んでコミュニケーションを図ろうとする態度」(第1表)の中の項目ごとに考察した。

その結果、「話している人の目を見て聞くことができた」「相手によく分かるように話すことができた」「進んで活動することができた」と感じる児童が増えた。また、英語活動を、より楽しむ児童が大幅に増えた。このことは、児童に英語活動における自己効力感がついてきたことによる成果であるといえる。

さらに、高学年にとって苦手であるとしていた「恥ずかしがらずに進んで話す」ことも、「できた」と自己評価する児童が増えていたことは、自己効力感に着目した指導の工夫が有効であったためと考える。

#### おわりに

検証授業が進むにつれて児童の集中力も高まり、指導計画及び指導方法が、児童にとって力に応じた活動、力を発揮しようと思う活動になっている手応えを感じることができた。授業におけるICT機器の利用も有効であり、教師が授業づくりを工夫することで、児童の意欲を引き出すことができることを改めて実感した。

今後は、他の教材や他教科でも自己効力感に着目した指導を行い、児童に進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育てていきたいと考えている。

#### 引用文献

- 中央教育審議会 2006 初等中等教育分科会教育課程部会(第39回(第3期第25回))配付資料2-1「小学校における英語教育について」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/004/06040519/002/003.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/004/06040519/002/003.htm)(2007.4.20取得))
- 奥田真丈他 1994 『現代学校教育大事典』第3巻 ぎょうせい p.355
- バンデューラ, A. 他 1997 『激動社会の中の自己効力』金子書房 p.i

#### 参考文献

- 文部科学省 2007 「平成18年度小学校英語活動実施状況調査 集計結果」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/19/03/07030811/004.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/03/07030811/004.htm)(2007.6.8取得))
- 文部科学省 2001 「小学校英語活動実践の手引」開隆堂
- 久埜百合 1999 「こんなふうに始めてみては? 小学校英語」三省堂